

日本における伝統型保守主義はいかにして可能か : 志賀重昂との関連で (下)

著者	荻原 隆
雑誌名	名古屋学院大学論集 社会科学篇
巻	44
号	1
ページ	90-79
発行年	2007-07-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000345

日本における伝統型保守主義はいかにして可能か

——志賀重昂との関連で——(下)

荻原 隆

目次

- 一 伝統型保守主義(国粹主義)は成立するか
- 二 伝統型保守主義の条件——伝統性と普遍性——
- 三 丸山真男の日本精神史評価
- 四 津田左右吉の日本精神史評価(以上前号、以下本号)
- 五 日本における伝統型保守主義はどのような形を取るか
- 六 志賀重昂と伝統型保守主義
- 七 日本の伝統型保守主義——自然と作意、内在と外来、そして自大と自虐の和解——

五 日本における伝統型保守主義はどのような形を取るか

ある民族が圧倒的にすぐれた外来文明と出合った時に、悪くすると、学習も吸収もできないままに圧倒され隷属してしまうとか、従来
の文化が破壊されあとは渾沌が残るだけということもある。この
ような事態を恐れて、外部の文明を拒否し、ひたすら自分の文化を守
り続けるということもあるかもしれない。しかし、一定程度の文化・
知性のレベルと進取の気性を持っている民族ならば、とりあえずひた
すら受容・模倣するであろう。この場合、縮小再生産にしかならない
場合もあるが、外来文明を模倣しつつ努力を重ねていけば、少なくとも

もある部分ではやがてそれを乗り越えることもできなくはない。

日本はこのようにしてたとえばものづくりでは西洋を凌駕したところ
すらある。その時に、日本人の伝統的な繊細さ・器用さを高度技術
に生かしている。また、平等は概念としてはやはり西洋原産である
が、日本人は欧米人以上に安定して平等型の国家社会を作ることがう
まい。これは単一民族で調和・横並びが好きという日本人の伝統をや
はりよく生かしている。このように日本人は西欧文明(おそらくはか
つては中国文明に対しても)を模倣しつつ、ある部分でそれを追い越
していった。その場合に、かなりたくみに日本人の伝統の一部を生か
しているのである。したがって、日本人の外来文明への対処の仕方は
単純な模倣ではなく、模倣と深化とその場合における伝統の再活性化
を含んでいる。

しかし、深化と伝統の再活性化を含むとはいえ、日本の近代化はや
はり追いつき追い越せ型に含まれる。これはこれで大いなる意味があ
るが、日本人が普遍的な文明に貢献するにはこれしかないのであらう
か。欧米にも中国にもインドにも中近東にもない独自の風土と歴史か
ら普遍的原理を育てあげていくことはわれわれには不可能であらう

か。丸山はその可能性を想定していなかった。おそらくは、近代文明の受容・深化における独自の伝統（徂徠や福沢のような「中国プラス西欧（作為）」でも「西欧（作為）」型伝統でもない日本独特の伝統）の再活性化すらあまり考えていなかったのではなからうか。

丸山は日本人の意志の弱さを責めるが、裏返して言えば、意志が弱いからこそ平和でおだやかなのである。もちろんこのような気質にはさまざまな弱点が伴う。状況にひきずられたり、あいまいにことを済ませる、ごまかすという悪い癖がそうである。しかし、それは理念や意志の強さが一方でさまざまな問題を引き起こすのと同じである。長所は同時に弱点であるならば、弱点は同時に長所である。弱点の弱点たるゆえんを鋭く自覚しながら、弱点を普遍的原理に育て上げていくことがどうしてできないのであろうか。

日本には規範的原理がないと言われるが、津田を解釈するなら、可能性としてはかならずしもそうではない。日本人はこういうおだやかさ、平和性、温和性を長きにわたって少なくとも感性のレベルでは原理として持っていた。縄文時代が平和であったことはとりあえず置くとしても、古代が比較的平和で、建国の過程も諸外国ほど戦争や征服一辺倒ではなく、話し合い・妥協があつたと考えられること、その後もちろんいくたの戦争は起こったが、他民族の侵攻を受けることや人種・民族・宗教に絡む極端に血塗られた絶滅戦争のような経験はほとんどなかった。平安時代初期の平和、江戸時代における二五〇年以上にわたる平和、そして、戦後の社会がその安定性、調和性において世界にほとんど比類がないこともこういう無意識の原理が機能したからだと言ってもよい。平和からもうとも遠かったのは武士であり、武

士の時代であるが、その武士によってさえ最後には世界に類例のない平和が築かれたのである。もとより、日本人は概念化するという作業が苦手なうえに、伝統の内容自体が温和性、おだやかさであることもあつて、それは自覚的な原理に高められることも、それに基づいて意識的に国家社会が導かれることもなかったが、それは規範の可能性・潜在性を持ったものが日本の伝統の中になかったということにはならない。

保守主義者・国粹主義者はこの日本人のおだやかさ、平和な気質にもっと着目すべきだった。これによつてはじめて、(一) 伝統性、(二) 普遍性という保守主義の成立条件を満たすことが可能になる。なぜならば、この精神は気候がおだやかであり、民族の興亡をあまり経験しなかったという世界に比類のない伝統から生じている。まさしく、日本独自のものである。しかも、これは他の伝統とは違って、空間的・時間的・社会的に圧倒的である。太古からほとんどすべての日本人はこの伝統の中で生活してきた。これに比べれば、時間的にも、社会階層的にも限定される武士道などものの数にもならない。また、この伝統は、平和や平等や弱者への配慮や社会福祉のような普遍的原理に展開しやすい。武士道や国体精神よりはるかに普遍化への可能性を持っている。縄文時代の平和、とくにこの時代における環境との平和（調和）まで含めれば、エコロジカルにも展開しうる。平和主義こそ日本の風土や民族生活から生まれ未来に展開されるべき保守主義なのである。

六 志賀重昂と伝統型保守主義

もつともすぐれた日本の保守主義者として通例最初に挙げられるのは陸羯南であるが、羯南ではなく志賀を取り上げてきたのは、後者が平和主義としての保守主義の可能性をある程度持つからなのである。羯南と志賀を対比しつつ、この点について少し述べて、志賀の脆弱性と可能性を考えておく。

志賀と羯南——保守主義の一貫性を巡って—— 志賀重昂は明治

二一年創刊の雑誌『日本人』の中心メンバーとして、陸羯南は翌二二年発行の新聞『日本』の主筆としてともに明治二十年代を代表する保守主義者であり、お互いに共感と友情を持っていたが、しかし、思想者の質としては羯南のほうがかなり上であろう。たとえば、文章を取り上げてみても、羯南の名文家はよく知られているが、志賀は羯南ほどうまくないし、格調もない。志賀の『南洋時事』（明治二〇年）は処女作だから未熟なのはしかたないとしても、代表作である『日本風景論』（同二七年）もやや感情過多で、美文調が重苦しく感じられるところがある。また、志賀はすこし概念性や論理性が必要となるとついでいけないようで、すぐに説明不足や論理の矛盾破綻を起こす。志賀の本領は思想者というよりも、旅行家・地理啓蒙家であろう。ともかく、この論理的概念的構成力の弱さは思想者としてはかなり致命的である。

そして、この論理的弱さとも連関するが、保守主義の本質的魅力である姿勢の一貫性や主体性という点でも志賀は羯南に明らかに劣る。植手通有氏は羯南について次のように言っている。もし、保守主義と

は既成事実に埋没し、歴史の流れに無意識のままに押し流されていく態度であると規定すれば、日本に保守主義が強く存在してきたことは否定できない。しかし、保守主義とは、たんに伝統や習慣を尊重するのではなくて、個々の状況において保守すべき伝統を自覚的に選択し、一定の主体性をもって歴史に対処していく態度であるとすれば、日本にそうした自覚化された保守主義が稀であつたことも事実である。羯南は近代日本において自覚化された保守主義にもつとも近い人物であつたと言つて間違ひなからうと¹⁾。

このように植手氏は羯南を近代日本にはまれな自覚化された保守主義者、主体的な保守主義者と評している。たしかにたとえばこの自覚化の度合いで見ると、志賀はどうてい羯南にかなわない。政教社『日本人』の陣営の中で国粹主義の概念をともかくもつとも精神的に考察したのは志賀であり、それらの論文にはなるほどかなり保守主義者らしいところがあるが、その期間は『日本人』創刊前後のほんの二年程度である。それでも、『日本人』の中心的同人であり、『日本風景論』（明治二七年）を書いたりしているから、われわれはつい彼を保守主義者のように錯覚してしまうが、彼の書いたものをよく読めばほとんどが近代的ナショナリズムの焼き直しであつて、国粹主義ではない。彼は国粹主義者を短期間で止めてしまったのであるが、もともと彼の国粹主義には近代主義への強いコンプレックスや羨望があつたのである。転向そのものはしばらく置くとしても、変節以上に問題なのは志賀がその理由について何も語ってくれていないことである。これは他者にはまことに不誠実である。そして、深い反省の欠如は思想を内側から革新することを不可能にする。

こういう点でも志賀は羯南にはとうてい及ばない。陸羯南は民権論や欧化主義には保守主義の立場から対峙し、日清戦争後の国家主義的風潮には今度は自由や立憲主義に拠って対決するようになるが、植手氏によれば、羯南はその場合、日本の政治状況における自己の立場の変化を鋭く自覚し、繰り返し読者に弁明や自己批判を行っていた^②。一方、志賀はこういう主体的で、鋭い自覚や深い内省を伴う保守主義者にはなれなかった。日本の近代化が進展するといつのまにか近代的ナショナリストに成り変わってしまった、しかも、それについて真摯な反省や納得のいく説明がない。信念のある保守主義者というより、時流に乗るタイプであろう。彼は性磊落で、その肥大せる体軀とあいまつて東洋豪傑風なところがあり、物にこだわらないところは人柄としては愛せるが、思想者としての主体性・自覚性の欠如は問題である。

志賀と羯南——文明批判を巡って——また、文明批判の深さの点でも志賀は羯南に及ばない。羯南は志賀に比べてはるかに強い文明批判や、これと連関するが西洋諸国への批判・反発を持っている。『原政及国際論』（明治二六年）の「原政」編は立憲政治という文明の政治制度がはたして本当に良いものかどうかを主題としている^③。羯南は、時にルソーを持ち出しながら、立憲政治、政党政治、法治主義のような近代の政治形態に対し、それらは人間の本質を低劣に解釈する利己心、党派、生存競争の政治であり、一見進歩のように見えながら道徳心や責任意識をないがしろにするもので、王道ではなく霸道であると手厳しい^④。羯南は、もとより立憲政治の導入は支持し、国体との両立を可能と考えながらも、一方で近代政体が我国固有の伝統的な徳義の政治や社会の良俗を破壊する危険性に悩んでいた^⑤。立憲政治を含め政

治社会の近代化が固有の道德や良俗を破壊するのではないか、文明社会とは猜疑心によって武装する時代であり、財利を重んじて義理を軽視する社会ではないかという懸念は羯南が繰り返し表明せざるをえなかったところである^⑦。

また、西洋諸国が文明のたてまえで行う国際政治のイデオロギー性（虚偽性）についても羯南は激しく怒っている。彼は列強の侵略性（文化的な間接侵略を含めて）に強い警告を発するとともに、彼らの言う文明権利平等や国際法が後進国に対していかに虚偽に満ちたものであるかを激しく告発している^⑧。それはまた、日清戦争後、西洋のあとを追って、東洋に覇権を確立しようとする日本への厳しい警告でもあった。

このように、羯南の場合は志賀と違って、西洋文明と西洋諸国に対する強い批判反発がある。これは考えてみるとあたりまえのことであるが、あえて近代主義とは基本的に方向性の異なる思想を唱えるに当たって、西洋文明なり西洋諸国に対する深刻な懷疑や批判がないと、わざわざ伝統主義のようなものを主張する決定的な理由がよく分からなくなる。ところが、志賀の場合には欧米諸国に対する怒りが希薄であり、コンプレックスや憧憬のほうがはるかに強い。したがって、志賀が国粹主義を掲げる思想内在的な必然性がよく分からない。西洋文明への憧憬が強いことから、あえて国粹主義の看板を掲げずに、福沢諭吉や小野梓や徳富蘇峰のように近代主義のナショナリストとして主張を展開してもよかったのである。

それに対し、羯南の場合は西洋文明に対する評価だけでなく鋭い反発や告発が存在し、保守主義を標榜するだけの内的な必然性がある。

したがってまた、羯南の場合は国民的伝統的なものと普遍的西洋的なものの葛藤に真摯に苦しんでいる度合いが志賀よりも強い。もとより、羯南も『近時政論考』（明治二四年）その他で、国民主義を唱えるのはやがて世界文明に貢献するためのプロセスであり、国民主義と文明博愛はいずれ調和すると繰り返しながら、しかし、一方で、近代と伝統、文明と国家、普遍的なものとなシヨナルもののはらむ深い対立と緊張に鋭い関心を持ち苦悩していたのである。このような苦しみ⁽⁹⁾が志賀になかったわけではないが、やはり羯南に比べるとるかに弱い。したがって、志賀の場合、既述のように、西洋文明と国粹的伝統がいつもあつさりと、あるいは強引に結び付けられてしまうのである。

志賀を対象とする理由 志賀と違って羯南の場合は、保守主義を採る思想内在的な必然性がハッキリしていた。ただ、問題は羯南の場合、西洋文化に抗して守り抜こうとした伝統の中心が、国体思想、ないしは名分的な道德思想であつたことである。よく知られているように、彼は明治二二年二月一日紀元節のこの日、新聞『日本』創刊に際して皇室こそ「国家善美の淵源」と謳つた。⁽¹⁰⁾ここから、西洋文明を乗り越えるようないかなる普遍的原理が出てくるであろうか。それはほとんどまったく不可能であろう。また、国体論的道德や情愛によつて立憲政体や近代社会の害毒を中和しようなどという考え方⁽¹¹⁾にいたつてはしよせんアナクロニズムにすぎない。羯南に保守主義を採る内在的必然性はあるが、保守すべきものの自体に普遍的な可能性がないのである。ここに羯南の決定的難点がある。

そして、津田が鋭く指摘したように、国体論が日本の本質的な伝統であるというような伝統主義者の考え方は錯覚で、日本人のおだやか

で平和な気質と生活こそ根源的な伝統であり、平和な歴史が王朝の交代を不必要とし、国体思想はむしろそこから派生したと解釈するほうが正しい。この点で羯南もまた多くの保守主義者と同様に通念の陥穽にとらわれてしまった。

国粹主義者たちは日本人のやさしくおだやかな伝統に着目し、平和主義という形で保守主義を展開すべきだった。日本の本質的伝統を普遍化するにはこれ以外にない。明治の国粹主義者たちの中でこの可能性をある程度持つのは三宅雪嶺でも陸羯南でもなく、志賀重昂なのである。

志賀はとくに概念や論理の使い方に難があり、その点では思想者として一流とは言えないが、その国粹主義のなかに、日本の保守主義の可能性を考えるうえで興味深い示唆が含まれている。彼もまた他の国粹主義者と同様に武士道や国体思想に強い愛着を持っていたことは間違いないが、一方でおだやかさ・平和性（調和、ないし調和としての美）こそ日本の伝統の本質と考えていたところがある。うまく発展させれば、普遍性の高い保守主義となる可能性をいちばん持っていた。

羯南でも雪嶺でもなく志賀を取り上げてきたのはそのためであるが、志賀のこういう思考ははなはだ不十分なままに終わつてしまった。なぜそうなつてしまったのか、どうすればよかったのか。彼の思想を例に日本の保守主義はどう作つたらよいのか、その時にどこに氣をつけたらよいのか。

志賀の脆弱性 志賀重昂は、思想内在的に考えるならば、もともと日本文化の伝統に強い愛着関心があるという意味でのナシヨナリストではなかった。それは札幌農学校時代の日記を見てもすぐ分かる。日

記には伝統への関心を窺わせるようなものはほとんどない。志賀は本質的に近代主義者であり、英米崇拜者なのであるが、それにもかかわらず、彼は世話になった杉浦重剛や師の宮崎道正との人間関係に惹かれる形で多少心ならずも伝統主義の陣営に身を投じたのである。

本心からの伝統主義者でないという弱さは処女作『南洋時事』にも出ている。本書の目的は南洋開拓で欧米に遅れるなという主張に尽きており、文明批判という点ではいささか物足りない。近代と伝統、西洋と南洋という視点からもつと葛藤や苦悩があつてよいし、近代文明批判があるべきなのであるが、期待はずれである。武力の行使に批判的であることを除けば、欧米の垂流を行くものにすぎない。

こういう弱さは国粋主義の観念を展開するのにあたつて概念の矛盾や論理の混乱を引き起こしていく。彼は一方で「国粋」とは伝統の保存発展であるという定義をしておきながら、他方でそれは生物的な「勢力」の保持拡大であるというようなおかしい説明をしている。勢力の保持拡大ということならば、一般には近代化・文明化したほうがよいのであつて、こうなると、国粋主義と文明化の区別が付かなくなってくる。

そして、この概念の矛盾を覆い隠そうとするため、次に、国粋主義は西洋文明と背反しない、前者は後者の吸収導入に大いに役立つというようなまことに強引な説明をしてしまう。論理的には完全な破綻である。言うまでもないが、日本の伝統と西洋文明がそうそう簡単につながるわけではない。だからこそ国粋的なものの本来の存在意義があるのではないか。伝統文化と西洋主義が矛盾葛藤することをまず認めたうえ、西洋文明にどう対処するか、近代と伝統をどう結びつけるか、

というのが困難であろうともまともな議論である。またこういう議論の進め方をしないと、伝統をもとに西洋の近代とは少なくとも重大なところで異なる——当然、異なるべき——日本の国家社会の未来図が描けない。

本来の伝統主義者ではないという弱さはその代表作『日本風景論』にもかなりはつきりと出てくる。日本の風景を取り上げたところは高く評価してよい。日本の自然はそのおだやかな美しさにおいて世界に比類がないからである。同時代の国粋主義者はなぜこの国土にもつと着目しなかったのか、もつと誇らなかつたのか、そして、精神的意味を考えてみながつたのか実に不思議なほどである。志賀だけが日本の風土を題材に一書を出したのである。しかし、内容を通読するとこれもまた落胆させられる。せつかく日本の風土を取り上げながら、志賀は欧米や大陸の広大で偉大な景観が羨ましく仕方がなかつたからである。だから、彼は無理に無理を重ねて日本の雄大な景観をあれやこれやと拾い出しているではないか。これでは日本の風土を取り上げた意味がない。風土論を日本人の精神論に展開することもできない（また、風土への着目はともかくもあつたが、長きにわたる民族の興亡の欠如という独特の歴史が日本人の精神性にどのような影響を与えたかを考えたことはほとんどまつたくなかつた）。

志賀の可能性 もともと伝統主義者でなかつた志賀は相当無理をして国粋主義を主張したために、さまざまな思想上の弱点や矛盾混乱が生じたのであるが、他方、生来の伝統主義者でなかつたために、妙な思い入れや固定観念から比較的自由で、逆に日本の伝統の本質がわりあいよく見えていたところがある。

多くの国粹主義がつまりくのは、日本の代表的な伝統を国体思想別に、武士道というのも多いが」と思い込んでしまうところである。羯南がそうだし、雪嶺も伝統の本質を捉えきれないままに、やがて、国体論に回帰した。保守主義者たちはほとんど例外なくここで決定的な錯誤を犯す。ところが、津田によれば、国体思想は日本の伝統の本質というよりも、むしろその象徴、あるいは派生物である。日本のより根源的な伝統は、平和性・おだやかさにあり、この環境が万世一系の皇統を生んだ。この関係がよく分かっている伝統主義者たちは例外なく国体思想の陥穽にはまってしまふ。

ところが、志賀は伝統にそれほど思い入れがなかったため、国体論や武士道——もちろんこの二つに敬意は持っていたが——という思い込みをとらわれず、平和でおだやかなところに日本人の本質を求めた。これが保守主義者として志賀のすぐれたところである。そして、伝統との連関がどれほど明瞭に意識されたかは問題があるが、つつましく、あたたかく、家庭的で慈愛に満ちた生活を守ることこそ国粹主義の使命であるというまことに興味深い主張があった。明治政府の文明開化策に対し、無理な近代化をするな、国民の生活を守れと唱えた国粹主義が立つべき拠点はまさにここにあった。明治国家の近代化とは違う国家社会の可能性が萌えていたのであるが、残念なことにせっかくの未来図もその後はまったく育てられずに終わってしまった。

けれども、志賀は終生ほぼ一貫して平和主義者であった。それがどれほど伝統との関連から主張されたかは怪しいところがあるし、後年はまったく国粹主義を忘れてしまったが、それでも武力を背景とする海外進出には初期の『南洋時事』でも、晩年の著作でも明快に反対し

ている。この点も高く評価してよい。また、協調外交を重視し、アジアに対し、そしてとりわけ英米との連携平和の重要性を強調した。今後は石油が国家の死命を制する、夜郎自大のアジア主義を唱えてもし石油資源を押さええている英米と戦争にでもなれば日本の破滅であるという洞察にもまことにすぐれた先見性があった。

もし志賀があくまでも伝統に立脚し、それと結び付ける形で、平和や国家の未来を語ることができたとすれば、彼は保守主義者として日本精神史に屹立する存在になったであろうが、もともと伝統への愛着が薄かった。彼の本質は西洋主義者、とくに英米崇拜者に近い。だから、志賀の『日本人』の諸論文ですら、国粹主義という言葉使っていない場合には「欧化主義者」の書いたものかと思うほどである。そして、同誌を離れたあとはもはや国粹主義の片鱗も感じられない。かつてそうだったということが信じられないほどである。これは彼が日本前途について考えなくなってしまったということではまったくない。日本のためにあれこれと良い発言はしてくれているが、自国の伝統に誇りを持ち、そこから発想するという意味での国粹主義者ではまったくなくなってしまったということである。この点、伝統への無知や誤解があるにもかかわらず、伝統にこだわりの誇りを持ちたいという思いの深さで雪嶺や羯南は変わらざる伝統型ナショナリストである。もし、志賀に羯南のような深い文明批判と伝統への誇りが、そして、羯南に志賀のような伝統の解釈があれば日本の国粹主義はもっと豊かな成果を結んだであろう。

以上、志賀重昂を例に日本の伝統的ナショナリズムはどのようにして可能か、その時に、どこに注意すればよいのかを論じてきたが、最

後に平和主義という形で日本の保守主義・伝統主義を構築することの意義を、文明原理の「自然と作為」「内在と外来」、そして、民族の「自尊心」という観点から考察し、この小論を終えたい。

注

- (1) 植手通有「陸羯南——ナショナリズムと『豆論人』」、朝日ジャーナル編『新版 日本の思想家 上(朝日選書 44)』(1975年、朝日新聞社)、二〇二頁参照。また、陸羯南『近時政論考』(1972年、岩波文庫)に所収の同じく植手「史論としての『近時政論考』」のところに末尾参照。
- (2) 同「解説」、同編『陸羯南集(近代日本思想大系 4)』(1987年、筑摩書房)、五〇九〜二二頁。ただし、同氏も、羯南の対外論、とくに日露開戦前後の対外論は大きく「分裂・矛盾」しており、ほとほと当惑したと述べている。同書、五三二〜三頁参照。
- (3) 『原政及国際論』(明治二六年)、西田長寿・植手通有編『陸羯南全集』(1968〜85年、みすず書房)第一巻、二二八頁。
- (4) 同、一三二〜三頁。
- (5) 『原政』のところに「進歩主義と社会公德」および「結論」参照。
- (6) 同。
- (7) 「誠心」(上)——(下)(明治二四年一月)、前掲『陸羯南全集』第三巻、「立憲政体をして国を誤るの具とならしむ勿れ」(一)——(二)(同二四年一〇月)、同巻、「社会礼習論」(上)——(下)(同二五年一月)、同巻、「国と社会」(同三五年一月)、同第九巻などを参照。
- (8) たとえば「国民的建国」(乾)——(坤)(明治三三年九月)、同第二巻、や『現政及国際論』(同二六年)の「国際論」編、同第一巻、『陸羯南全集』(同二七年)の「国際論補遺」、同巻、「獣力進歩の時代」(同三二年二月)、同第六巻、「真正の文明国(自称文明国と野蛮の行動)」(同四月)、同巻

など参照。

- (9) 『近時政論考』(明治二四年、同第一巻、六七頁、「国政の要義」(三)(明治二二年二月)、同第二巻、三二七頁、「世界的理想と国民的觀念」(二)(同三三年一月)、同巻、三三三頁、「国民的建国」(乾)(明治三三年九月)、同巻、七〇五頁などを参照。
- (10) 「創刊の辞」(明治三二年二月)、同第二巻、三頁。
- (11) たとえば、「家族的生活及び政治的生活」(明治二二年九月、同第一巻、「謹読勸語」(明治三三年一月)、同第二巻、「斯道論」(同)、同巻、「立憲政体をして国を誤るの具とならしむ勿れ」(一)——(二)(明治二四年一〇月)、同第三巻などを参照。

七 日本の伝統型保守主義—自然と作意、内在と外来、そして 自大と自虐の和解—

自然と作為、内在と外来の和解

民族の興亡がなく、おだやかで温和な歴史風土に根ざした伝統から規範を作り上げることの重要な意義のひとつは、「作為」型規範とはまた違ったある種の自然的な原理を可能にするところにある。これは日本人の規範意識を多様に豊かにするであろうし、「作為」型原理の欠点を補つてくれよう。

丸山のいわゆる「自然」から「作為」へという図式は必然的に作為型原理の採用を志向するものである。このタイプが荻生徂徠の「礼楽」、そしてとりわけ福沢諭吉の「文明」であった。「文明」とくに「近代文明」は知識人と大衆によつて意識的無意識的に作り出され、大きな時代の気風となっていく。この原理がいわゆる「自然法」もしくは「天理」と決定的に違うのは、宇宙自然が与えたものでもないし、人間の

自然性に最初から宿るものでもなく、作り・作られたというその作為性（主體性）にある。もちろん、福沢の近代「文明」は主體的に作られたものではあるが、一方で多くの人々の無意識の氣風・風俗となつて定着・継承されつつ変化發展していくところに一種の自然性が混在してくる。宇宙自然でもないし人間の自然性でもないが、長い時間の中で生成していくという意味での歴史的な自然性を持つていたのである。したがって、単純な「作為」型原理ではないが、自然法や天理が所与のものであるのに対し、知識人と多くの国民によつて作り作られたというところに大きな特徴がある。まさしく、人間の主體的な産物である。

しかし、この主體型原理には大きな弱点がある。それはしよせん人が作つたものにすぎないということにある。もちろん、近代文明は多くの人々の努力と長い年月が作り上げたものだが、しかし、それにしても、神が与えた、天地自然が定めた原理に比べれば、まことに不完全であり、誤りの多いものである。人々が近代文明をより完全なものにするために今後またゆめめ努力を積み重ねるにしても、完全な文明は無限の彼方にある。福沢における理想の放棄は思想原理的には作為型文明のこの弱点から出てきている。もちろん彼の変化はより直接的には当時の世界や東アジアの情勢が原因ではあるが、規範の構造から見ると作為型原理の不完全性を力の論理に加担する理由としているのである。

このように、作為型「規範」は高い主體性を持つが、同時に人為的不完全性という大きな弱点を抱え込むことになる。そしてその弱点がしよせん理想は無意味であるという力の論理に格好の口実を与えてし

まう（丸山自身も徂徠の「人作説」が彼自身の意図と離れて、法制度の恣意的な改変に道を開くものであること、人間の作つたものは人間の破壊しうるものであるという論理に帰結することを認めている。『日本政治思想史研究』第二章第五節、『丸山真男講義録「第一冊」日本政治思想史一九四八』第七章第四節参照）。

しかし、二千数百年——縄文時代の平和を含めるとゆうに一万年を超える——の長きにわたる伝統から規範を作り出す場合は簡単にそうはならない。近代文明の形成にも三、四百年の時間はかかったであろうが、日本人のおだやかさの伝統ははるかに長く、しかも外から来たものではなく内に存在するものである。天地、宇宙の与えたものではないにしても、われわれの体質に染み付いたものという意味で自然的である。このことは原理の安定性に多大の貢献をする。これほど長期的で内在的な伝統を簡単に否定したりすることはできないからである。これが伝統の強みである。

もちろん、この伝統を規範化するためには、自然性に安住するだけでは不十分で、意識化・自覚化するという作業が必要になるし、これを守り抜く——どうしても避けられない場合は、武器を取つてでも——ということもあるかもしれない——決意や覚悟が求められる。また、現代においてはさまざまな形で日本の平和の伝統を世界に向かって自覚的に広げていくとする努力もきわめて重要である。戦後の日本はこういう努力がある程度してきたが、いつそう高める必要がある。そして、新しい時代の平和として、たんに国家のあるいは国際間の平和だけでなく、自然との平和、自然との共存共栄を考えるとよい。これは伝統を新たに拡大し、展開する試みとなる。縄文時代の平和はまた同

時にきわめてエコフレンドリーであったと言われるから、日本の伝統をこの意味で拡大再解釈することには無理がない。自覚的に平和を国際社会に広げることも、自然との共存に再解釈することも、伝統を意識化する契機になる。こういう一連の作業によって伝統の自然性に意識性・作為性が結びつく。このような自覚化・意識化のプロセスをおして自然性を基本にしながらもそこに主体性が結びついた規範が出来る上がる。

丸山・植手氏のような考え方では、日本に普遍的な原理はなかったから、近代文明をいったんは我がものとし、やがてそれを追い越していくという原理の作り方しかなかった。この方法が普遍性に貢献する立派なやり方であることは十分に認める。しかし、近代・現代文明の不完全性が常にそれを否定する口実になり、また、今日でもしばしば内外の民族主義者に見られるように、近代・現代文明の外来性が反発を呼ぶのである。もとより、西洋文明をいったんは模倣しつつ、深め、広げ、豊かにするという作業を我々は今後も必ず継続しなければならぬ。西洋文明はそれだけの値打ちを持つ。しかし、同時に自然的で内在的な規範の作り方があるのなら、それは作為的で外来型の規範の欠点を補ってくれるだろうし、なによりもわれわれは豊かで多様な原理を持つことができる。

そしてこの伝統を伝統として正しく評価し保持していくことは、欧米文明に対しても新たなまた真に主体的な受容の仕方を可能にしたはずである。志賀は伝統に愛着や誇りがさほど持てないままに、国粋主義を標榜したから、結局のところ、伝統の上に西洋化が可能であるというような、伝統と欧化を強引に無原則的に結びつけようとする失敗

を犯してしまった。これでは西洋文明を真に自覚的に選択受容するということは難しくなる。もし、志賀の立場からこの問題へのひとつの回答を描くとすれば、それは次のようになる。

調和(平和)こそ日本の伝統の核心であるというその考え方を生かし、国際的には平和、国内的には平等調和(ないしは福祉)を重視するような国家社会の未来像を描き、これにふさわしい西洋の理念制度や文化技術を優先的に導入するという方向に議論を展開させる。これは当然、平和や平等にふさわしくない西洋文明のある部分を抑制し、あるいは断念し拒否することを含む。もとより、西洋文明のさまざまな要素は不可分に結びついており、機械的にある要素部分だけを取り出すということはなかなかむずかしいが、しかし、やろうと思えばできなくはない。こうすることによって、伝統の枠組みに照らして西洋文明を鋭く批判しつつ、導入することが可能になる。日本の伝統から主体的に西洋文明を選ぶことができる。日本の伝統と近代文明はじめて深い必然的な結合がもたらされるのである。そこから出てくる国家社会像がたんなる欧米諸国家の模倣でないことは言うまでもない。志賀にはこの可能性がある程度あつたのだが、伝統を正当に誇るという作業が十分にできないため、最後は、欧米の模倣追従のような形で終わってしまった。逆説的言い方になるが、伝統を伝統として正しく評価し、確立することこそが、自覚的で選択的な欧米文明の受容に道を開くのである。それこそ、内在と外来の本当の和解であろう。

自大と自虐の和解

伝統的ナショナリストは、日本の温和な風土自然、激しい民族の興

亡がなかったというおだやかな生活に着目して新たな平和主義を構想すべきである、こうすることによってのみ日本の風土と歴史に根ざし、なおかつ普遍妥当性の高い内容を持つ保守主義が生まれて来るという主張をすると、たとえば丸山真男のファシズム分析を支持する人々からは次のような反論がなされるであろう。日本人のおだやかさは一方で言うとき意志の弱さであり、状況に流れやすい主体性の欠如である。

このような意志の弱さこそが世界状況に引きずられるような形である。一五年戦争の悲劇を引き起こしたのではないかと。もとより、日本人のおだやかさは一方で言えば、意志性の弱さである。丸山はこのような意志の弱さが、状況に追従し引きずられていくような日本型のファシズムの原因になったことを、ドイツのファシズムの能動的ニヒリズムと対比し、「超国家主義の論理と心理」（一九四六年）以下の論文の中で、見事な論理構造的、心理的分析を加えた。

しかし、人でも、民族でも、大きな欠点は常にすぐれた長所である。長所と欠点は表裏一体である。丸山はこの誰でもが日常的に良く知っているまことに平凡な、しかし、深い真理に気づかなかったか、うつかり見落としたように見える。それは、太平洋戦争という有史以来の最大の民族的悲劇を見ながら、それを繰り返すまいとして出発した丸山政治学と、それ以前に基本的には形成されていた津田史学との違いであろうか。両者とも日本人の本質について同じ認識に到達していると言つてよいのだが、津田は日本人の意志の弱さを厳しく戒めながらも、丸山のようにそれを一方的に切つて捨てるのではなく、反面でそれをおだやかなやさしさとして深く愛惜し評価している（ただし、逆に言うとき、津田は日本の軍国主義については本格的な分析や論評をし

ていない。したがって、日本人のおだやかさ、やさしさがなぜ侵略やそれに伴う残虐性を生むに至ったのかというメカニズムやからくりを明らかにしていないことに——ないものねだりではあろうが——不満が残る。あれほど日本の伝統について深い理解に達していたのだから、丸山のように伝統と軍国主義の構造的連関性を考察した研究があつてもよいように思われるのだが。

そして、振り返つて見ればそもそも深刻な欠陥や重大な虚偽性を持たない文明や原理などがあつただろうか。すぐれた宗教的原理がその独善と傲慢——丸山政治学の好む主体性は常にこういう悪徳に陥りやすい——によつて、どれほどの虐殺を行つたか。西洋文明が偉大なる光明と同時にどれほどの抑圧と戦争をもたらしたか。欧米人としての進歩や豊かさはアジア人やアフリカ人にとつてはいつたにたつたのか。平等とか開放という社会主義の理念が実のところどれほど悲惨で残酷なものであつたか。我々の信賴する近代的な原理、たとえば自由は常に弱肉強食あるいは放縦や無秩序に陥る危険性を持つし、権利はエゴイズムや身勝手と紙一重である。平等がしばしば自助努力の放棄、無責任の温床になったことも我々は良く知っている。

すぐれた宗教、あるいは高い理念や理想、そして光輝ある文明、そうして規範的原理と呼ばれるものはまったく似ても似つかぬ悪徳や虚偽と表裏一体であり、そこに転化するあやうさを常に秘めている。このことを鋭く意識し克服しようとするため努力によつてかろうじて規範は規範として維持されてきた。日本の風土と生活と歴史に由来するわれわれの気質にも大きな弱点があり、そこから平和という規範を導き出すことにも問題性はあるが、しかし、それはすべての規範に

まつわるものである。我々が日本人の民族的な欠点を正しく意識し、努力するならばそれは十分に克服されよう。また、そういう努力なしにいかなる規範も規範たりえないはずである。長きにわたる民族の生活や感性の中におのずと培われてきた平和の伝統を自覚化・概念化するという作業をおして、また平和を守りぬく決意をおして、そして方やむをえざる場合には戦う覚悟や準備をおして、無意識の伝統を意識的・主体的な規範原理に高めることは十分に可能である。自国の伝統に不当に低い評価を与えるという傾向はそろそろ卒業したい。誰かが言っていたように思うが、民族や国家であれ、個人であれ、自分を正しく誇れるもののみが、また自分自身の欠点や罪惡について言葉の本来の意味で真摯な反省ができると信ずるからである。